

## 第八章 農業協同組合の發達

### 一、協同組合の前身の無尽講

講は民俗の項で詳述しているように、もともとは信仰の組織である。これが八日講、出し合い講になっては、いくらか信仰の面影を残しながら、部落の春秋の農閑期の慰労会のような形に変わってきたものようである。

もう一つの發達は無尽講とか頼母子講のような、貧窮におちいった人というより、その家の共同救済或は貯金組合、何かの共同購入組合への方向である。農産物を共同で出荷するという考え方は、藩政時代には、米による現物の上納制度が苛酷なまでに強かったから、あまり發達していたようにはみえない。むしろ刻苦して貯蓄しようとする精神を、その頃の指導精神としても、農民心理としても滲透していたように思う。

各部落に観音講とか伊勢講のような名称で、実はその講の集りに、いくらかの金銭を集めて貯金しておき、困っている人にはそれを貸付けていくらかの利息をとり、年限を切つて、まとまったお金を分配するなどのことが行なわれていた。それを毎月一定の日の掛金制度にすると、もう講とはいい得なくなつて、貯金組合のようになる。現在も町場の、毎日の売上げのある人々が、日だめ銭とか、月がけ貯金などしているのはその類である。

この形態が、相互援助になつたのが無尽講で、相当まとまったお金を出し合つて、年一回とか二回せりおとしその人は次回から利息をまとめて抛出してゆく。これらは、農業生産を積極的にすすめるとかでなく、消極的に零細な貯金をしてゆくとか、借財のかさんだ者を救済する方法として、農村社会自身で考え出してきたものとも